

畑の洋服？（サツマイモ栽培）

品川区立荏原西保育園（東京都品川区）

[5 歳児]

[例年、近隣の平塚中学校の畑を借りてサツマイモを栽培している。]

1 冬の畑を見る <2月(4歳の時)>

サツマイモを掘ったところのことを思い出し、いも畑が今どうなっているか話し合ってから、冬のいも畑に行く。自然の移り変わりを目や肌で感じ、変化する事が子どもたちにわかってきた様子がうかがえる。

A児：「虫が全然いないね！」
B児：「虫も寒いから隠れているんだよ！」
C児：「葉っぱがないね？」
B児：「暖かくなったら、草も生えてきて、虫も沢山でてるよ！」

2 雑草取りをする <5月上旬>

5歳児になった4月、中学校に「今年も畑を貸してください」とお願いをする。サツマイモの栽培ができることを楽しみにしている姿が伺われる。楽しみにしながら畑の様子を見るが、土が見えないほど畑一面に雑草が生えている。ジャングルのような畑の雑草取りをする。

「ここ畑なの？」
「草がすごいね！」
「虫がいるよ」

3 畑を作る <5月中旬>

先週畑の草取りを終え、今日は何をするのかと“ワクワク”している様子で“サツマイモ畑”に行く。畑を見て、「何もない畑をどうしたらいいの？」どの子も見ている。園長先生から畑の作り方の説明を聞き、畑を作る。

「芋の苗を植える前には、土を山のようにします」と、うねを作る話を聞き、みんなで力を合わせて作る。園長先生から「次に畑に栄養をかけます。みんなもごはんを食べると大きくなりますね」という話を聞く。

C児：「肥料って言うんだよね」

園長：「この肥料はどんな匂いがしますか？」

D児：「きなこの匂いかな？」

F児：「ごはんが炊けた匂いかな？」

保育者：「お芋の時の肥料は、うねの上にかけて土と混ぜるんだね。野菜の苗の時は、上にかけてたかな？」

A児：「野菜の時は、土の真中に入れたよね。」

保育者：「そうだったね。よく覚えていたね。」

B児：「なんでちがうのかな～？」

園長先生から「今度は、黒いビニールをかけて、土を温かくするんですよ」という話を聞く。

A児：「あっ、そうなんだ。畑も洋服を着るんだ」

保育士：「サツマイモは温かい土のほうがよく生長するんですよ」

G児：「なんか海の波みたいにゆらゆらしているね」

(ビニールが風で動くのが不思議に見えたようである。)

畑が出来たので、来週は、芋の苗を植えるという話を聞き、「楽しみだね。お芋いっぱいできるかな？」などと話し、園に戻る。

これが肥料か！
こんなのがご飯なのかな？



4 苗を植える <5月中旬>

畑に行く準備を済ませ、「黒いビニール袋を畑にかけたのはどうしてか、分かりますか？」と問いかけられた子どもたちは、「土を温かくするため」「私達が洋服を着ているように、温かくしてあげるとお芋が大きくなるから」など答えたり、苗の植え方を話したりして畑に行く。

畑の黒いシートの穴に手を入れて中の様子を感じ、穴を掘って苗を植える。

5 苗の様子を見る <7月上旬>

6月に芋の生長を蔓の長さで感じて測ったのでメジャーを持ち、黒いビニールで本当に土が温かくなっているのか確かめられるように温度計を持って畑に行く。

6月は56cmだったことを知っているのので、123cmになっていることが分かる。そのメジャーを縦に持ち、自分の身長を比べる姿があった。また、黒いビニールの中に入れた温度計は、見る見る赤い印が上がって38度になり、「本当に暑い！」と興奮気味に納得していた。



みどころ

子どもたちの栽培活動のために園外に畑を借りている園は、種まきや苗植えをし、生長を楽しみにしながら日々世話をしたり観察したりすることができないので、様々な工夫をしています。この事例では、畑作りを子どもたちとすることで畑が「身近な場所」になり、「土に黒い服を着せる」という印象的な経験により「本当に土が暑くなるの?」「芋が大きくなるの?」という不思議な思いや疑問、期待感をもって畑に行く姿につながっています。メジャーや温度計などが生活の中で活用されることで、幼児なりに不思議や疑問を追求して発見したり確かめたりする経験をしています。